

台湾高等女学校の研究

——台湾高女卒業生のアンケート調査から（I）——

山 本 禮 子

日本が台湾を植民地として統治していた一八九五年から一九四五年の五〇年間の女子教育機関としての高等女学校について、主として文献資料を中心に一九九三年「高等女学校の研究——植民地時代の台湾の教育——」と題して論述した。今回はその後、台湾を三回訪問して当時の高等女学校に学んだ台湾の人々に対してアンケートならびにインタビュー調査を実施した。本論文では主としてアンケートを中心にそこから得た知見にもとづいて実態を明らかにする。

1、調査の概要

(1) 調査対象・方法 調査対象校は、日本国内の同窓会に名簿を借用し、在籍者数に比例して五年おきに対象者をランダム

に抽出する。ただし、台北第三高女は重点的に調査をするために対象者数を多くした。そのほか、現地で入手した名簿による者、知人を介して紹介されて面接・アンケート記入という手続きを取った者もある。発送状況は表1に示した。

(2) 調査期間 一九九三年七月～九月

(3) 回収状況

実質発送数 七一八

有効回答数 二〇三

回収率 二八・三%

アンケートの学校別・年次別回収状況を表2に表示する。

(4) 調査内容

アンケートの内容は、原則的には前回までのものに準拠したが、高等女学校は日本植民地時代の産物であり、その点を

表1 学校別・卒業生年次別アンケート発送数

学 校 名	一九五	一九〇	一九五	一九〇	一九五	計
台北第一高等女学校	一	六	一五	二六	二	五九
台北第二高等女学校		一	五	四	一〇	二〇
台北第三高等女学校	六	六	六	五	二九	二九
台北第四高等女学校				五	五	五
蘭陽高等女学校				六	一六	三
台中第一高等女学校	一	七	八	九	一〇	三五
台中第二高等女学校					一	一
彰化高等女学校		一	七	二〇	三五	六三
台南第一高等女学校	三	四	五	五	五	三
台南第二高等女学校	二	二	三	三	五	一五
嘉義高等女学校		四	七	二二	一四	三七
高雄高等女学校		五	五	六	一四	三〇
屏東高等女学校				二	二六	二七
花蓮港高等女学校		一	二	二	八	一三
私立長栄高等女学校		五	四	三〇	二	四〇
私立静修高等女学校		二	七	八	一〇	二七
計	四	九	一三四	二〇八	三三四	七八

表2 学校別・卒業生年次別有効アンケート回答数

学 校 名	一九五	一九〇	一九五	一九〇	一九五	計
台北第一高等女学校	一		三	六	三	一三
台北第二高等女学校			二	二	八	一二
台北第三高等女学校	五	四	二	一五	二〇	五
台北第四高等女学校					一	一
蘭陽高等女学校				一	四	五
台中第一高等女学校		二	四	七	九	二三
台中第二高等女学校					一	一
彰化高等女学校			二	九	二六	三七
台南第一高等女学校				一	一	二
台南第二高等女学校	一		一		三	五
嘉義高等女学校			二	三	三	八
高雄高等女学校			一	二	九	一二
屏東高等女学校				二	八	一〇
花蓮港高等女学校			一	一		二
私立長栄高等女学校			二	三	二	七
私立静修高等女学校				三	七	一〇
計	七	六	三〇	五五	一〇五	二〇三

明らかにするための調査項目を追加する。高等女学校入学以前の学校名、その学校と高女の雰囲気の違い、中国語の学習状況、日本人の友人についての感想等がそれに該当する。アンケート様式は付表として本論文の末尾(次号)に添付する。

2、調査結果

(1) 生活環境

1 父の職業

高女生の父兄の主な職業(表3)は、本島人では商業が最も多く二六%を占め、ついで医師一五%、製造業の一〇%と自営的な職業が目立つ。それに対し日本人父兄は官吏・会社員・銀行員が六割となっている⁽¹⁾。このような勤め人は本島人では二割前後である。植民地としての支配を受ける中で、子女に高等普通教育を受けさせる階級は必然的にある階層に限定されていた現状を伺い知ることができる。もちろん、例外はあり、後に述べる入学の動機の中で触れていく。

2 母の職業

母の就業率は調査対象者の一割弱で、教員、助産婦について家業としての農業になっている(表4)。女性の職業として比較的条件の良い職種としての教職・医療従事者に高女生の母親が職を得ているということは、当時の女性に比し、高学歴を裏付

けることになる。

3 家族構成

① 核家族化

核家族の占める比率は六〇%で年代的な推移はみられない。台湾に移住していた日本人の核家族の割合が八割強であったのに対し、本島人の比率は低い(表5)。しかし、当時の本島人の全体からみると核家族が非常に多いとみてよい。一方、旧家の家制度が厳然として存在している台湾の富豪家では広大な敷地の中に多くの使用人を抱えつつ、数世代が生活を共にしていることを思うと核家族指数のみで近代化を推測することはできない。前回の調査で日本本土で一九三〇年以降核家族対大家族の割合が二対一から三対一に移行している事実を指摘したが、それと比較して大家族制度が保持されていると見てよい。

② 兄弟数、使用人数

一家族の子供の人数は平均五・〇人で、日本人家庭と全く同数である(表6)。また、使用人の人数の平均が二・四五人で、日本人家庭の二・五九人と有為な差はない。このことは台湾に移住している日本人家庭も、高女に子女を通学させる本島人家庭もある程度の生活の豊かさを示していると見てよいであろう。

表3 父の職業

職 種		
	実数	台湾人
警察	一	〇・五
裁判所	一	〇・五
軍人(軍関係)	一六	八・四
官吏	一四	二・一
市町村長・議員等	五	二・六
地主	四	二・一
大企業経営者	一	〇・五
中小企業経営者	一	〇・五
恩給・金利生活者	七	二・三
農・林・漁業	二〇	二・六
自営商業	二九	五・八
自営工業・製造業	二九	五・八
医師(医療関係)	一	七・九
教職・住職等	一	七・九
神職・住職等	一	七・九
技術者	二〇	二・一
会社員・銀行員	二〇	二・一
自由業者	二	一・四
工場労働者	一	一・四
金融業・貸地業	一四	七・四
合計	一九〇	一〇〇・〇

表4 母の職業

職 種		
	実数	台湾人
貸地業	一	五・五
教員	六	三・三
農業	三	一・六
貸家	一	一・五
助産婦	三	一・六
裁縫	一	一・五
製造業	一	一・五
商業	一	一・五
会社員	一	一・五
茶道等	〇	一・五
茶道	一	一・五
合計	一八	一〇〇・〇

表5 核家族化

項 目		
	実数	台湾人
核家族	一二二	五九・八
大家族	八二	四〇・二
合計	二〇四	一〇〇・〇

(2) 高女生の生活

1 出身校

本島人が原則として公学校に在籍していた時代に、少数の子女は日本人の子供が通学する小学校に通っている。その比率は二四・六％で、四分の一を占める。植民地としての台湾に日本語教育を強制した当時の教育方針は、進学したい本島人に進学有利な小学校教育を親が望んだのも必然的な傾向であった。しかし、四分の三は本島人の子供が在籍する公学校から、日本人の進学希望者に伍して高等女学校に進学した学力を評価すべきであろう。公学校教師は中等教育機関に入学させるべく、進学指導に熱中している様子がアンケートに伺われる。「全学年で成績がよくて先生の強い薫陶の許でガリ勉を強いられ、励まされた。無給の補習でした」(台中第一高女 H-2²)。そのため、公学校の生活は悲惨であったと述べる者がいるほどである。

2 入学の動機

この設問については、あらかじめ作成した選択肢からの複数回答を要求し、その他として自由記述を求めた(表7)。回答者の八三％は「自分の意思」で高等女学校の進学を決定している。大半は、進学が当然との受けとめ方である。「親のすすめ」は四〇％、「教師のすすめ」が二割弱となっているが、特に初等教育機関での成績がよく教師が親を説得する例も見られる。「教師は

表6 兄弟、使用人の平均人数

項目	台湾人家庭	日本人家庭
兄弟数	五・〇〇	五・〇〇
使用人数	二・四五	二・五九

表7 入学の動機

項目	実数	調査対象者に 対する割合
a、自分の意志	一六二	八二・七
b、親のすすめ	七八	三九・八
c、教師のすすめ	三六	一八・三
d、兄弟姉妹のすすめ	九	四・六
e、役人のすすめ	一	〇・五
f、その他	三三	一六・八

私の成績がよく、進学すべきだと何度も親を説得し、解き伏せてくださいました」(台南第二高女 H-2)「公学校の恩師から『将来母校のために先生のバトンを受け取って頑張りなさい』と励まされた」(長栄高女 H-2)。多くは親・兄弟・親族を含めた教育環境が恵まれていて、彼女達は進学を必然的なものとして受けとめ、高女生の制服姿に羨望の眼を注ぐ。その中で、将来の職業人としての自分の夢を実現させるための過程として理解している人も見られる。「医者になりなくて、どうしても吉岡

弥生先生の学校に入りたかったのですが、時代が許さなかった。今でも残念に思っております。あの時代に日本人に負けたくないという強い意志の下に励まされた」(台中第一高女 H-2)。この傾向は、教師希望者にも多くみられる。台湾の高女生の医学専門学校への進学率は、日本の高女生のそれよりは高かったのではなうか。また、台湾の父母の中に男女の差別なく高等教育を受けさせようとする傾向を垣間みることができる。

このような恵まれた生徒が大勢いる中で、つぎのような文に出会う。「小さい頃両親を失った父は学校へ行けなかったのが悔しくて、時たま用事で台北へ行きました折、汽車の中や駅で見かけた大学生の角帽姿が羨ましく、十人の男の子を持っている父は子供達を是が非でも大学まで出そうと決心し、女の子の私には女学校でよかろうと台北へ出してくれました」(台北第四高女 H)、「貧苦な家に生まれて二歳の時生父亡。母は労苦に絶えず、六歳の時一人娘の私を都会の金持さんに養女として正式に買われました。その時、小さいながらも頭に覚えているのは手環、その他の物品です。入学試験に合格できたら勉強させるとの約束でした。」(台北第三高女 F-4)、「行きたいと思っただけ父なき子、貧乏なので行きたいといえない。教師が『行きたいなら無条件で教えてあげる。家の方と相談しなさい』とだけです。二兄は伝道師でお金がない。看護婦にと言われたが恐い

のです。文具店を経営している三兄は、『行きたいなら勉強して合格するように、そのかわりただの書生ではないけない、母が弱いので、家事の手伝いをしながら勉強するつもりで』といってくれた。」(高雄高女 F-1)

親の切なる願いを身に受けて進学する子ども、多くの逆境を乗り越えて勉学する子ども。それぞれに個々の人の成長にきき糧になっていたことを知らされるが、人生模様的一端を見る思いである。

つぎの一文は、真偽の程を解明しないまま掲載する。

「行きたい行きたくないではなく、行くのが当たり前ではなかったでしょうか。当時日本政府は入学試験において私ども台湾人に対して三〇点のハンデをつけておりました。行きたくても行けない人が沢山いたようです。二弟、三弟、四弟は普通並の成績しか取れそうにないので、大東亜戦争の始まった翌年の二月、一家総揚げて日本本土へ移転しました」(高雄高女 H-3)

3 高等女学校の雰囲気

アンケートの回答でみる限りにおいて、一八三名中小学校卒業が四五名で、後は公学校もしくは高等小学校卒業で、それは七五%を占める。そのため、台湾人の就学率の少ない学校へ進学した生徒にとって次のような嘆きの声が聞かれる。

「全然違います。日本人ばかりで話しが早い。台湾人がクラスに一〇人を越えない、その中に小学校をでた台湾人が半分いる。公学校の台湾人は発音が違うので笑われる」(高雄高女 F-1)、「女学校に入って台湾人を蔑視する少数の生徒、教師がいることを感じた。」(嘉義高女 H-2)、「日本人(内地人)が三分の二本島人が三分の一のため、入学と同時に圧迫感を受けました。一部の日本人の先生と生徒が一部の本島人の生徒を蔑視し、植民地を感じました」(嘉義高女 G-3)

しかし、小学校から台湾人の就学率の高い第三高女に進学した人は「ずっと小学校で日本人のお友達が多かった私には、台湾人の主な三高女にはなかなか馴染めず戸惑いを感じたものです。小学校に比較して皆さん明るくなく、オープンにしてくれませんでした」(台北第三高女 G-15)との声がある。

一般的には高等女学校の雰囲気をつたいへん楽しいものとして受けとめている。その一端を引用する。

「立派な校舎。校門を入ると車廻しの円形の高い植木、砂利道の両側に鈴蘭。校内にはいる前に草履に履き変える(当時は運動靴が手に入らない)。ロッカーに鞆を置き、毎時間各科の教室に行くのが小学校とは全然変わった生活。自然に学校の名誉を傷つけないようにと頑張りました」(台北第三高女 H-13)、「校舎のスケールや設備、それに小学校のそれとは異なり、興奮

したものです。郊外の田圃の多いところに雄大に立っている校舎は大きな夢を持たせてくれました」(台北第三高女 H-18)、「学校は広々して清潔。樹木、芝生は青々とし、宿舍は和やかで家庭的な雰囲気。食事も自分の家よりも美味しく、補習科の一年も入れて楽しい収穫の多い五年間の乙女時代をおくることを得。人生の基礎を培って頂きました」(彰化高女 G-3)、「女学校はミッションでしたので、今までの田舎の公学校と全然雰囲気は違います。校舎も洋館建てで周囲はレンプの森、朝や放課後、休み時間はピアノ・オルガンの音、あるいは合唱の声で一杯でした」(長栄高女 G-3)

このような自然環境と共に、「女教師の着物、袴の姿、校友の制服はアイロンを通してキチンとしていた。靴下と革靴の儀客は公学校では見られない。先生に出会う度に軽くお辞儀をし、上級生にも礼を尽くすなど、気質・精神面は子どもから大人の世界に入ったような穏やかさでした」(台北第三高女 F-1)。淑女の世界に入ったようだとの回想もある程、憧れに満たされた女学生生活をエンジョイするのであった。

しかし、一方で差別に対する不満、戦争が激しくなっていく時代へのやり場のない怒りが伺える。「総じて楽しかった。でも、出征兵士の見送りに、ある時、日の丸を忘れたら小さい声で、非国民といわれました。頬を叩いてやりたい嫌な思い出が

一つあります」(台南第一高女 G)、「規則正しくプライドの持てる良い学校でしたが、本島人に対しては、あまりよかったとは思いませんでした。本島人鼻肩の先生が左遷されたので残念でした。公学校は日本人の先生も本島人の先生も全校がたいへん生徒を可愛がっておりましたが」(台中第一高女 H-2)、「一年の時大東亜戦争が始まり軍隊教育に等しい絶対服従を強いられ、勤労奉仕ばかりどんどん増えてあまり楽しい学校生活ではありませんでした」(台北第一高女 H-2)

戦争たけなわの時期に女学生生活を送った者の多くは、折角入学したにも関わらず、充分学業にいそしむことの出来なかった悔しさを筆に託している。

4 高等女学校の授業

① 修身

修身の授業に対しては概して良い感情を持っている。教育勅語に関しても倫理的な道德観念の面からの把握に終始していることが伺える。そのため、修身の教科担当者の人格との関わりでの感想が大半を占める。

「教育勅語があつて、皆公德心の修養になつて良かったと思います」(台北第一高女 F-2)、「この教科の担任は校長先生である。校長先生に対して、皆常に敬意を抱いているから、この授業の時は何時も緊張していた。しかし、本当に得るものが多

かつたと思う」(台北第三高女 G-9)、「型にはまつた修身の授業は本当に退屈なものでした。四年生なりまして校長先生の活気ある実生活に関係ある豊富な話題で教室は盛り上がりました。また、修身の科目は欠くべからざるものと強く思われてなりません」(台北第三高女 G-15)、「校長先生ご自身の教えて、人は豆腐のように豆、豆しくあれと教えたのが印象的です」(蘭陽高女 H-3)、「皇民的でしたけど、やはり自己修養の時間が必要です」(蘭陽高女 H-4)、「一言一語が心にしみ込みます」(台中高女 E-2)、「正しい心の持ちよう、身躰けの授業でしたから、皆熱心に先生のお話を聞き、人としての世代にも必要なお諭しでした」(台南第二高女 H-1)、「誠実、勤勉、謙虚等、女の子は将来、良妻賢母になるべく三従四徳等の内容」(嘉義高女 H-2)と修身の教育内容に対して肯定的である。さらに、「教頭と校長が受け持つ。修身の本はないし、試験のないので極楽である。女性たるものの修養、家庭、社会にでてからの心得などの講義」(台北第三高女 F-1)と評価するものもいるが、退屈な講義に終始する場合もあり、生徒は安らかに睡眠を取っている。なかには、「人となり」の課程以外は精神教育だった。『萬山重からず、君恩重し。一髪軽からず、我命軽し』(台南第二高女 H-3)、「道德とか婦徳とかを教えておりましたが、台湾人と日本人の道德観念に多少の違いがあるので比較し

ながら聞いておりました」(台北第一高女 F-3)と冷静に捉えている生徒もいる。批判的な感想として「日本的な修身は、私にとっては納得できないことが多く、大日本帝国は世界で最高と教えられたが、英国、美国の民主化に憧れた」(台北第三高女 H-6)、「ひたすら軍国の母を目指して忍耐の精神を養いました」(彰化高女 H-9)。

これと対比して、ミッションスクールの場合には明らかな相違が認められる。

「当時の台湾総督府規定通りでした。しかしシスターの愛の心が印象的」(静修高女 G-2)、「修身科はなかったようです。そのかわり聖書を読まれ朝晩簡単な礼拝がありました。…帝主義の中で民主的な教育をしていたのでしょう」(長栄高女 G-2)。しかし戦争たけなわになっていくと「精神訓話比較的に多」(長栄高女 H-2)くなっていく。

② 国語

日本語による国語教育に対し総じて好感をもって綴られている。

「私は本島人でしたが、日本の文学に大変親しんでおりました。文学方面で気の合った日本人のお友達と文学小説を交換したり、図書館通いして図書係になりました。万葉集、歳時記、漱石集。若山牧水集等今でもいろいろ読んでいます。戦後、文

学も読んでおります。俳句、和歌等一人で楽しんでいます」(台中第一高女 H-2)、「当時は和歌、作文、読書報告、先生への暑中見舞い、慰問文等と各方面にわたって実際に自分で作ったりしたので、日本語の実力を付けるのに役だったと思う」(台北第三高女 H-20)、「国文の先生は優しい方で、和歌や俳句の指導をしてくださり、教室を出て四季折々の草花、木の名前を教えてくださいましたのが楽しい。また、古文でわび、さびの奥ゆかしさをしみじみと感じました」(彰化高女 H-6)、「国語の勉強を通してさらに生活の情趣、修養および文学の教養を増進した」(台北第三高女 F-8)のであった。

不思議に思われるほど日本語に対する嫌悪感を披瀝する者はいない。かえって、「台湾人として修学旅行で日本へ行っても、土地の方々から『東京から来られたのですか』と聞かれる程、標準語を使っていた」(台北第三高女 E-1)ことに誇りもち、平素の教師の指導に感謝している。戦時下のため授業が中止となり、「学科に代わって雲母剥ぎや芋掘をやらせられ、歌も軍歌ばかり歌っていた」(台北第四高女 H)ことに対する残念な想いが切々と綴られている。

日本語に対する親しみが、今日の『台湾万葉集』の隆盛もたらしたと見るべきであろうか。筆者は、若者の旺盛な知識欲がひとつの形を取って開花し、文化として実を結んだ証左と評価

したい。これをもって植民地教育の言語教育の成果としてはならないと考える。各国の母国語が尊重され、その上で他国の言語を消化吸収する事が、真の平和共存をもたらす鍵ではなからうか。

③ 地歴

ロマンに満ちた人間の歴史の歩みに、生徒の多くは吸い込まれる想いをもって教師の講義に集中している。それは地理の教科においても同様であった。そのため、「日本の国についてだんだんと深く了解し、本当に日本国の国民になりたいと子ども心に思っておりました」(台中第一高女 F-4)、「地理を勉強しまして日本の国は地理的に細長くて海国だと思いました。一度は必ずや行ってみたいと念願したものです」(台北第三高女 F-6)、「日本の歴史、文化、地理の背景を教えてください。日本人の精神力は強い、われわれはそれを勉強すべき」(台北第三高女 F-8)と当時の女学生のところに刻印付けをしていたことを知る。台北第一高等女学校の教師は、ユニークな教授方法を展開しており生徒に印象深く受けとめられている。

「個人の能力を発展させるため、生徒と先生に模して歴史・地理を教え、また他の生徒から質問を受ける教育方法は大変進歩したものと思います」(台北第一高女 G-2)、「予習をみっちりして授業時に発表させる方法」(台北第一高女 G-6)、さら

に「H先生の教えてくださった歴史は私をして種々の本を漁る生地を作りました」(台北第二高女 F-1)との評価も出てくる。「歴史の先生は学校を卒業して間もない若い先生で人氣的、出征の時最後の時間に皆で泣いた」(台北第一高女 H-1)、「大学出たての若い先生に教えられたから授業の内容よりも人間性に興味を感じた」(台北第一高女)と教師の人格的な面での良き出会いがあったことを窺わせる。しかし一方、「教科書にはまった授業が多かった。古今東西、時間、空間の中の地歴を幅広い視野で比較思考する啓発が少なかったように思う」(彰化高女 H-4)との批判もある。

「おもに日本の歴史と地理でしたのに何の疑問もなく受けておりました」(台北第一高女 F-3)との言葉に心が痛む。「おもに日本の歴史・地理、ついで外国のこと、中国大陸に関することは習った印象があまりない」(台北第二高女 H-3)、さらに「日本の歴史、地理には明るかったが、中国の歴史、地理に疎いのは大変恥ずかしい限りです」(台中第一高女 H-2)、「……特に日本史は詳しく教えられたため、中国人でありながら中国史の判らない中国人です。ただ『奢れるものひさしからず』の歴史です」(台中第一高女 G-4)、「地理は台湾について詳しく習ったが、歴史は台湾について簡単過ぎたと今でも思う」(台北第三高女 H-15)、「中国は広いし、台湾との関係も深いので、

中国の歴史・地理を取り入れて欲しかったが、教科書に無かったのが不満だった。ヨーロッパの文化にも憧れた」(台北第三高女 H-6)。ほとんど日本史ばかりであったとの指摘は他の女学校の生徒にも見られる。「歴史：皇室、幕府、萬世一系、忠義、地理：各県の行政、産物、交通、気候」(台北第三高女 G-1)とのみ書かれた回答は何を語ろうとしたのか。印象に残った単語の羅列だけではないであろう。また戦争が激しくなり授業がほとんどなされぬまま、地歴の教科書は手つかずのままと述べる世代もある。最後に「何かの間違いを犯したら『リーヤ(支那人)』と一人の先生から軽蔑されました」(屏東高女 H-6)との訴えが寂しく響く。

④ 外国語

敵国語としての英語が軽視されたことは日本本国と同様であり、はじめは二年あるいは三年から選択制になるが、後では中止に追い込まれていく。一、二年で担当した教師の発音の十分さを指摘するアンケートが多い。

「一年の時の英語の先生は良かったです。でも召集令状を受けて、二年から正規の英語の先生が無く、とても粗末な内容でした。和訳ばかりで、英訳不要といわれました」(台中第一高女 H-8)、「週二時間でしたが、はじめは一生懸命勉強するつもりでしたが、先生はよく休むし、四年間習っても弟に『君達は化

粧品の名前さえ読めたらよい』と笑われました」(台北第三高女 F-10)との述懐がでてくる。「戦時中のため、これから日本語が世界語になるから英語はみて判ればよい」と豪語する教師もいた。その中で、「私は手芸が得意だったが、三年の時英文科に分科された。時は丁度八年中日戦争であつたので、英語の試験は倍以上難しく感じた。学校の寮では消灯時間に対して規制があり、時間外の使用を禁止されていたので、我々はよく懐中電灯を使って英単語を一枚一枚暗記した」(台北第三高女 G-9)「三、四年の先生の英語はガリ版刷りの講義、試験の時は辞書を使つての翻訳、丸暗記の人はがっかり、お蔭様で随分実力がつきました」(彰化高女 H-3)、「発音の正確を重んじる先生と極めて発音の悪い先生がいた。予習、復習のため欠かさずためにプリントを切つて下さり、文法にも力を入れて下さる資質のすぐれた教学熱心な先生は、惜しくも他校に転出した」(彰化高女 H-4)と記述される英語教師は少なかつたのである。

⑤ 理数科

数学についての回答は理科に比べて少なく、教師についての印象程度に留まっている。その中で特記すべきことは、台北第三高女における珠算の指導である。「算盤の教学、足し算、引き算、掛け算、割り算まで他校より優秀」(台北第三高女 E-1)で、授業の始めに教えている。台中第一高女でも珠算について

触れている「三角、幾何等大変でした。珠算算盤は、日本人は私より弱いです」(台中第一高女 H-2)。このことから珠算を導入していた女学校がほかにもあったのではないかと思われる。

数学に対して理科は、印象に残る事柄が多いことを窺わせる。実験、採集、標本作り、解剖等実地授業が彼らの脳裏に焼き付いている。そのいくつかを引用する。「動植物、生理衛生共に興味深い。受け持ちの先生は学習院出身のとても優しい方でした。物理、化学に至っては先生が手品師のように理論や公式を覚えるのは大変ですが、実験を見るのは面白く化学の時間は特に楽しい学科でした」(台北第三高女 F-2)、「晶造り、昆虫採集、蛙の解剖、おたまじゃくしの飼育、実地の理科の先生、惜しい事にこの良い先生達が一人一人兵隊に引つ張られて行かれました。大変寂しかったです。」(台中第一高女 H-2)、「実験は生徒を何組かに分けた。「コロンプスの卵」の実験で、まず生徒を外に出して教室を密閉し、教師が二個も立ててみせた」(彰化高女 H-8)、「理科ではいろいろな標本を見るのが大好きでした。一年生の夏休みの宿題に植物採集。奇妙な植物をと大変苦労をしました。化学室での実験は、何人か一組で、ある時は薬物の臭いがむつと鼻を刺激するのを良く覚えております」(台南第二高女 H-1)、「動物の解剖や植物の採集が楽しかったです。夏休みに標本を作る宿題など何時も良い作品を作って

展覧されました」(屏東高女 H-2)

概して、理科教室の施設設備が整っている。しかし、「実験器具は相当完備していたが、ある時、実験用のアルコールランプの火が生徒の髪に引火して、顔を火傷した事件後、実験は減少し講義のみとなった」(彰化高女 H-4)という予期せぬ事態に苦悩に満ちた対応をした様子が想像できる。

ミッションスクールの長栄高女の理科の先生は、「ケンブリッジを出た台湾人でしたが教え方が上手で実験も巧みにされて皆の興味をひきました」(長栄高女 F-2)と記されているように、年度によっては数学も担当された方で、光復後同校の校長になられた方である。

⑥ 芸術

「音楽一般の教育はもちろん、作曲、作詞の訓練、指導をしております。三年からはオルガンの練習。早い生徒はピアノを訓練しておりました」(台北第三高女 E-1)との言葉で分るように音楽教育はある水準をいつていた様子が分かる。「音楽授業に最高の配慮があった。教室は広く、明るく、音響も良かったが、惜しいことに二、三年の二年間は、先生が出征のため、台中高女の音楽教師が週一時間、三つの組の生徒(約一四〇名)の混合授業で、二年間に数曲の斉唱だけだった。しかし、四年になって先生が復員され正規の授業に戻り、慶祝紀元二六〇〇

年祭の催しには、ピアノ、バイオリン、お琴、男の紳士の尺八のオーケストラの大合唱は盛大でした」(彰化高女 H-4)、「音楽学校を出たばかりの若い女の先生が赴任して来られた時、初めてのクラスで選ばれて先生とローレライを合唱しました。年輩の先生のオルガンのレッスンは厳しく、ちよつとでもミスをしたら手を鞭で叩かれました。でも、お蔭でオルガンの基礎がしつかり身に付きました」(台北第三高女 H-8)、「音楽に対する学理、音階、音符の認識すべて女学校の音楽授業で会得しました。先生は本校の卒業生で東京音楽学校卒業後母校で教鞭を取ったR先生、専攻は声楽、瘦せて当時にしてはおしゃれな方です。授業は熱心で音楽会のある時等練習から指揮全部担当されました」(長栄高女 G-2)とあるように、台湾籍の卒業生が教壇に立っている。この先生はその後台湾大学の教授になられたのである。カトリックの静修女学校では、フィリッピン籍の先生で厳しいが、教学法は上手であるとの評価を卒業生はしている。このような芸術の世界にも戦争の波は押し寄せ、末期においては軍歌が多く歌われたのである。

一人の生徒はつぎのような思い出を綴る。「音楽の先生は少し変わっていて採点には学生の顔も入ります。オルガンの時間に『譜を見て手を見るな』と注意されますので、級友の一人が先生に『手を見て顔を見るな』と、あの時の大笑いは今でも覚えて

います」(台北第三高女 G-15)。

美術の授業では、台湾籍の教師が割合多く就職している。写生、図案、デッサン、スケッチ、水彩画さらに絹絵にと女学生は意欲を燃やす。

「台湾美術展の審査員で有名な先生が担任して、生徒も全島から集まった優秀な生徒で、在学中から時々台展に入選しておりました。図画は写生だけでなく、変化した図案は刺繍に使用したり、染色に使用します。輪絵や模倣を好まず、皆創作が好きでした」(台北第三高女 E-1)というように絵画と手芸の刺繍とが一体になったの指導がなされている。

⑦ 体育

体育関係の種目を羅列すると、球技(バスケットボール、バレーボール、テニス、ピンポン、ドッジボール)、器械体操、リレー、ダンス、水泳、薙刀、弓術、馬術、柔道、縄跳、短距離、羽根突き、ラジオ体操、海軍体操、女子青年体操、水球、跳箱、競歩、陸上競技とほとんどの種目が豊富に並ぶ。施設設備により、また指導者の力量によって学校ごとに取捨選択される。思い出の二、三を挙げる。

「バレーボールが主でした。校庭が野菜畑になりましたのでその周囲で何かをやって時間を過ごしました」(屏東高女 H-6)、「バレー部にはいつてました。時々指がはれました。卒業

するときに二五米のプールを泳げない人は合格できないと先生にいわれたので随分水を飲んで練習しました」(高雄高女 G-12)、「敵前上陸に供えて薙刀稽古、大きな声を張り上げてはちまきを締めて、今思ひ出すとおかしいです」(屏東高女 H-2)、「一高女は、知、徳、体育三位一体の学校でしたので、体操の授業は、水泳、ボール、馬術、弓の時間がありすばらしい授業でした」(台北第一高女 G-2)、「運動場を十周は走らせられたり、熱暑の陸上競技、幅跳び、三段跳び、ハードル、リレー等、良い鍛練でした。お蔭で七十、八十と長生きしています」(彰化高女 G-3)、「ブルマー姿で、又は短いパンツ姿、とても鍛えて貰って良かったと思っています」(彰化高女 G-4)、「先生から体操の時間にすいすいと気軽に歩く方法を教えられました。薙刀の振り方や社交ダンスの基本動作もありました」(彰化高女 G-9)。

学校内の体育に留まらず、代表選手を台湾全土の大会に、また日本国内の代表選手として出場するといった事も数多くあったようである。しかし、戦争が激しくなる中で体操の内容が変質していく。「総督府前の閱兵行進が多かったような気がする」(台北第三高女 H-6)、「戦時中で、耐力を鍛えるために、検定試験ばかり受けていたような感じ」(台北第三高女 H-17)になるのであった。

⑧ 家事・裁縫

家事については、染色実習、家庭管理、栄養および献立のたて方等の学習があるが、感想は調理実習、当時の割烹に関するものが圧倒的に多い。「自分の家の台所にも入ったことのない生徒でしたので、お割烹の時間はママゴトの有り様」(第三高女 H-8)といいながら、多くの生徒のよき思い出となっているし、概して評価も高い。「結婚しても困らない位の家事を教えて頂ました」(第三高女 G-10)、「お料理の時はとても楽しい。白のエプロン姿が目につかぶ」(第三高女 H-5)ほどに懐かしい教科である。「新校舎落成後、学校側は家事科のために特別に近代的な調理室を設立した。一クラスの生徒をいくつかの班に分けそれぞれに調理台で先生の示範および黒板上の指示に従って料理の準備をし、皆で協力して実習」(第三高女 G-9)している。整った設備の中での実習、さらにその後の試食も自分で頂くと共に、先生方にも差し上げ講評を受けることに期待を寄せている。「一クラス五組に別れて料理を作り、先生方のご試食によって点数をつけられましたが、何時も美味しいと褒められました」(台中第二高女 H)、「家事の実習は面白い。そしてお料理だと試食があるので、どんなのが出来るのか期待があつて楽しい」(台北第三高女 F-2)。実習の内容は、台湾料理・日本料理・菓子類と多岐にわたり、戦時下にあつては、材料がなく実習が出な

かったことに対する失望が書かれているが、その中で、材料を家から持ち寄ったり野菜を植えることから手をつけたところもあったようだ。そこででてくるのが「茶巾絞り」という調理法で、登場回数のもっとも多いものである。「女として家庭の主婦として家事の仕事、ご飯の炊き方、野菜の切り方、作り方、いろいろ教えて下さいました。物資不足のため自給自足の精神を植え付けられました」(蘭陽高女 H-1)、「防空壕を掘りかまどを作り薪取りをしてご飯を炊きました。畑で取れた芋の葉、なすび等」(台中第一高女 H-2)が材料になる。「材料がないので山へ山菜を摘みに行き、おひたしにしたり、お芋を使った料理でした。『鎌を持って鍋を持たず』と溜息でした」(彰化高女 H-16)、「戦時中で材料がなく、大部分が雑草やカタツムリ等の料理を教えられ、口に入らなかった」(台中第一高女 H-7)と綴る人もある。さらに「軍隊の炊事に行つて、野菜を刻んだり、水汲み」が課せられた学校もあった。

裁縫は、他教科に比し、批判が少々集中している。まず、「台湾人ですから着るわけのない着物を縫わせらるのは大嫌いでした」(台北第一高女 H-2)、「着物一式雛形もあり、布はステールファイバーを使ったのもあり、戦時中で卒業しても使えない。中華民國になりて世論は反日故、これまた無用の長物」(静修高女 G-1)との指摘に対して、「和服は嫌だった。材料費が

高く、親に材料費を貰うのが辛かった」(台北第三高女 H-6)との言葉もあり、反省を促される。このような批判二〇通に対し、肯定者四八通、事実にはのみ触れるもの四四通となっている。肯定派の意見を取り上げる。

「一年から台裁、和裁、刺繡、手芸と分け、二年からミシンが加わり、それらの道具、材料を登校、下校に持ち歩いて家でやらなければ間に合わない。お蔭で腕が上がり、卒業したら皆良妻賢母の役を見事に果たしている。母の手になる着物の美しさ、温かさは他校の卒業生の模倣のできないところ。刺繡の献上品は皇室に献上の栄があった」(台北第三高女 F-1)、「和裁と洋裁があった。授業の前、先生は裁縫箱の中の点検をした。和裁では必ず運針の練習があった。卒業の時、自分の手で縫製した和服を着て涙を流しながら『蛍の光』を歌って学校と別れた」(台北第三高女 G-9)、「戦時中で材料不足のため、充分にやれませんでした。和裁の基礎は一通り教えて下さいました。」(台北第三高女 H-19)、「日本人の学校に入学したから、和服は私たちのとって役立ちませんでしたけれど、いろいろ縫い方において良いことをたくさん覚えしました」(台中第一高女 F-4)、「洋裁はエプロンから毛芯のつくジャケット、スーツまで、和裁は運針から始まり、男物、女物共に襦袢から帯、袴まで一通り習った。男物で父の着物と羽織の一揃いには父にとて

も喜ばれた」(彰化高女 H-5)。

戦時下では「二年生になってから『モンペ』を作りました。四年生になった頃『千人針』づくりの方が忙しかった」との感想が出てくる。実際には事態はもつと緊迫し、材料が準備できなくなると共に、授業さえも実施できなくなっていたのであった。

⑨ 中国語の学習

中国語の学習状況については回答者の8%が学校で学んだとしているが、一九四一年以降の中には光復後に卒業したものである。一九二〇、三〇年代で学校で学んだとするものは台北第二高女、同じく第三高女の四人に限定される。同時代の他の生徒からは中国語の学習はなかったとの回答であるため、正規の授業の形態は取っていなかったと推測できる。ひとつの事例「中国通の漢詩の先生から中国語を習いました。『人之初』、欲しいと思っても儘にならない時代です。毎年本島人をほんのちよっぴりしか取らない時代、入れたのがもつつけの幸い。大きな夢も持てません。植民地の悲哀」(台中第一高女 H-2)。この文脈のなかに秘められた本人の気持ちに想いを寄せたい。

学校以外で中国語の学習は三七%と数値が上がる。特に戦後の台湾の学校教育はすべて中国語でなされたため、公学校の教

師の努力は涙ぐましいものがあった。「光復した当時、小学校の代用教員を一年半ぐらいやった時に、前の日校長より習って翌日生徒に教えました」(台北第三高女 F-10)「終戦後、小学校教員になり、日本語から中国語に切り替えるために当時の国語推進委員会で真面目に習い、受け売りの授業をした」(台北第三高女 H-13)のである。なかには、「終戦後、父が家庭教師を雇って家族全員に中国語を教えた」(彰化高女 H-14)との記録もある。しかし、六割以上のものは改めて中国語を学ぶことなく過ぎたのである。親は台湾語、娘は日本語、その子供は中国語もしくは種々の理由でアメリカに移住したものは英語を修得し、三世代が異なる言語で意思疎通が困難という話はよく耳にする。言語政策のもたらした悲劇と言わざるを得ない。

このような体験が、「当時、授業に取り入れて欲しかった内容・事柄」についての筆頭として中国語もしくは漢文があげられ、ついで、英語・英会話と続く。中国の歴史、地理に関する情報ももつと学びたかった内容である。このような要望と並んで少数ではあるが台湾語・台湾文学を挙げている人もいる。郷土への想いの強さを知らされる。

注1 台湾の高等女学校に在籍した日本人に対する調査は、一九八九年に実施し、その結果は「高等女学校の研究(第6報)―外地高女卒業生のアンケート調査から―」(和洋女子大学紀要)

第31集(文系編)一九九一年三月発行としてまとめている。父兄の職業、核家族化の状況、兄弟数、使用人数は、台湾の女学校在籍の日本人家庭との比較である。

注² アンケート自由記述の引用文の末尾の符号は左記のような卒業年次を表す。なお数字は『戦前の女子中等教育の研究―高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料No.5 (台湾の高等女学校の分)』(一九九五年六月発行)に学校別収録した順序を示す。

- D 一九二五年型―一九二六年以前の卒業生
- E 一九三〇年型―一九二七―一九三一年の間の卒業生
- F 一九三五年型―一九三二―一九三六年の間の卒業生
- G 一九四〇年型―一九三七―一九四一年の間の卒業生
- F 一九四五年型―一九四二年以降の卒業生

注³ 本調査は、一九九三年度科学研究費補助金により実施されたもので、埼玉大学教授新井淑子と協力して調査にあたった。

(本学教授)